

一般体操 (団体徒手体操) の発展的動向の一考察

佐 藤 た け

I

日本体操協会が埼玉国体開期中 (昭和 42 年 10 月) に、昭和 43 年度の規定種目の試案 (女子の部) を発表された。この発表に際して、「国際競技につながるもの」と明示されたことは一つの躍進であり、発展的動向であると考えられる。

それは新式体操競技の国際競技大会が、その一か月後にコペンハーゲンで行なわれようとしていた時期にあたっており、実に時宜を得た発表であると思われる。

また新式体操国際競技大会は第 3 回の個人競技であり、国体体操 (1 チーム 6 名) の国際競技大会第一回が持たれるという期にあたって、「国際競技につながるもの」と明確に打ち出されたことは、世界観の上に立脚しての方向づけと解され、正に躍進であり、発展であり、意義深いものであると考えられる。

日本は団体徒手体操、一般体操、団体体操と名称が変わって来たが、その本質的目的は全く不変であることは周知のところであり、新しい動向を早急に研究し、十分理解して明日への発展に寄与すべきであろう。

規定種目は体操、自由種目はダンスといった全く異質のもので採点を行なった時代、体操とリズム運動という時代を通り、規定種目は体操、自由種目は手具体操、または手具リズム運動として競技大会が持たれるようになって来たことの競技種目は、実に多難な道をたどったが、今回ここに終止符を打って「国際競技につながるもの」……、これこそ日本の明日からの団体体操であると考えられる。

過去の幻影にまどうことなく、体操を愛好するものにとって希望をもたらし、意欲を与えたことの発展的動向を真剣に受けとめ、新しい困難を克服し、明るい楽しい競技に一般の温情と協力によって育てていきたいと思う。

II

単調なテンポとリズム、まるでタクトとしか感じられない、その上、空間構成の乏しさ、しかしインターハイの形式のような、この様な感覚から脱けだすことは許されない。「勝つこと」が試合をする上は大切な条件の一つで、その形式を破ることは、県代表チームとしては出来ないところに悩みは年と共につり、息づまる思いがあるが、これを打ち破る勇気のない自分のみじめさを痛感する。しかも競技者は若人である。私はもっと自由な、もっとダイナミックな、そして繊細な潤いのある美しさを求め品位の高い女性らしい楽しい動き、個性豊かな高度な構成、若人の今日の生活の中からほとぼり出る躍動、生命の力から湧き出る若人の **Energy** そのものの創造……と悩み続けたが、今回日本体操協会の明示されたように「国際競技につながる……」という規定種目発表は、広い世界観の上にたたれたもので、永い間の悩みから私は救われ希望と意欲を与えられた。

日本のこの競技会に「いどんだ若人」、その指導に寝食を忘れ生命をかけての研究をおしまなかった教師たちの喜びと希望とそして意欲を、私は全身に感得するものである。

個人競技としての新式体操の国際競技大会は、今回コペンハーゲンで持たれたのが第三回に当り、団体体操が行なわれる6年前に、すでに国際競技として世界の若人がこの競技に「いどんでいた」実態を思う時、日本がこの種の団体徒手体操競技会の歴史がすでに10年という実績を有するにもかかわらず、個人競技への発展に心を致すことなく今日を迎えたことは、体育教育者の一員として自責の念にたえない。

私は今から8年前(1960年)、日本体操協会の団体徒手体操の責任者に、この日本のみが持っている競技を世界に呼びかけて「国際競技」として発展させてほしいと数度にわたって懇願したが、全く耳を傾けられなかったことを改めて思い起し感無量である。

日本が、日本の女子が世界に呼びかけて「国際競技」に発展させる勇氣と世界観に目ざめていたならば、すでにコペンハーゲンで行なわれた団体体操第一回「国際競技大会」へ、堂々と「いどむ」若人の育成もなし得たであろうと。

その2年後(1912年)に個人競技の新式体操「国際競技大会」第一回が持たれたこと、勿論この競技が国際競技として育成されるまで世界はあらゆる面から研究の上に打ち出されたであろうことは言を俟たない。

6年の年月をひたむきに研究を積みかさねた世界と、今日眼をむけた日本との隔たりは余りにも大きい、今回日本体操協会が個人競技を加えて「国際競技につながるもの……」とその動向を明示したことは、体操競技の拡大と見るべきであろう。このことは、体操を愛好するものにとって、また新しい希望ともなろう。日本の16年の歴史を尊び、これを大切にしたい、歴史は生きていと信ずるものであるが、鋭敏な頭脳とすぐれた器用さを持つ日本人は、必ずや6年の遅れを縮めるであろう。しかし世界観の上に立脚した合理的な計画のもとにトレーニングを施す必要性のあることを重視しなければならない。

小学校、中学校、高等学校と一貫した綿密な計画において、もとよりすぐれた指導者の「動き」の究明と「動きの美の開拓の研究」こそ急務であるが、これと共に社会体育のこの種のスポーツの企画と発展とが伴ってこそ国際競技大会に「いどむ」選手を生みだせるものである。

コペンハーゲンの地は世界女性解放運動の第一声をあげたところで、すでに100余年の年月が流れているが、今日まで世界の女性を培った地でもある。この地で新式体操団体体操競技の第一回国際競技大会を持たれたことに対して、日本の女子体育教育者は全身全霊をゆすぶられる思いがあるのではなからうか。

歴史は尊い、日本の16年の団体徒手体操競技の歴史を大切にしたい。しかしすべてのこだわりから脱して、この競技を愛好する人々のために、明日へ伸びる純粋な若人のために前向きの姿勢で突進したい。そして日本の女子体育教育者の研究と意欲を結集し、「国際競技」のレベルまでアップさせたい、させねばならない責任と義務がある。これこそ先輩各位の労苦に答える道であり、今回日本体操協会が世界観の上に立脚して打ち出された「国際競技へつながるもの」とは「国際競技」への前奏曲であると私はうけとめたい。

III

競技の発展と審判は微妙なものがあるといっても過言ではなからう。

日本体操協会が、わずか一回の講習会で審判資格を与えることは納得出来ない実態である。現段階として止むを得ないとせず、今回「国際競技につながるもの」と明示されたこの機会に、審判養成も新企画と高い理想を掲げて早急になされるであろうことを願うものである。

日本の団体徒手体操の競技会（1952年から1967年まで）の審判経験年数を調査したところ、全国的に見て15年、10年の多数の経験者のあることを見のがしてはならない。こうした信頼と尊敬の持てる審判のもとにこそ、すぐれた演技が展開されるのである。

かくして国際審判につながる審判員の養成こそ急務であり、如何なる困難を乗り越えても必ず養成せねばならない責務である。とくにこの競技の明るい発展のために……。

日本の過去のこの種目における審判員の構成は、10名によって下記のようになされていた。

主審 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9

「国際競技大会」の審判構成は6名によってなされている。（1967, 11, 於コペンハーゲン）

主審 1, 2, 3, 4, 5

これまで日本の10名制の審判法は、主審は採点せず、1審から9審まで採点し、上位2、下位2の採点を除いたものの合計点を持って得点とした。「国際競技」の6名制審判法においても、主審は採点せず。1審から5審まで採点し、上位1、下位1を除いての合計点を3除して得点と決定するとある。

「審判は公正である、真正にしておかすべからず」と信頼と尊敬を持ってこそ、心ゆくばかりのびやかに、楽しくかつ堂々と競技会に「いどむ」ことができ、そこに若人の純粋な情熱が湧き出るのである。したがって日本体操協会は細心の注意と最大の努力を払って、高度な企画のもとに世界観に立脚した養成を望む次第である。

日本体操協会が、今日まであらゆる障害を克服して「国際競技につながるもの」と謳い、明日からの日本の団体体操、個人体操の新しい方向づけを行なったが、その開拓の意義は新しい審判養成と相俟って明確にされるのであろうと、この競技を愛好するもの等しく期待するところであろう。

IV

体操愛好者の底辺を拡充することの急務を私は痛感して止まない。幅広く大衆にアピールする必要性にせまらるる思いである。全国民が楽しく、明るく突進出来る組織づくりが望ましい。また性別、年齢層別に組織された体操愛好者によって創造され、大衆の今日の生活の中から生み出される体操でありたいと思う。

全国をいくつかのブロックに分けて、自分の体を大切にし若さと美しさと活動力を持ち続ける幸せを把握させることが重要な仕事ではなからうか。

二年に一回、または三年に一回でもいい、子供から年寄りまで輝く太陽の下に逞ましく鍛えた心と体を、心ゆくばかりのびやかに躍動させる楽しさと喜びを体験することによって国民の日常生活の上に美しい品位高い行動が培われていくことであろう。スパルタキャードのように、日本にも行なわれる日の早いことを望むものである。

体操の指導者は？ とは誰でも心痛める問題であろうが、私はここに日本の過去16年

間（1952年から1967年）の団体徒手体操競技大会に「いどんだ」群馬県高崎女子高校の実態調査を掲げて、全国的に推測して見たい。

群馬県高崎女子高校実態調査

(1952年～1967年)

年 度	昭和 27	28	29	30	31	32	33	34
年度内正選手	6	6	6	6	6	6	6	6
年度内補員	3	3	3	3	3	3	3	3

年 度	昭和 35	36	37	38	39	40	41	42
年度内正選手	6	6	6	6	6	6	6	6
年度内補員	3	3	3	3	3	3	3	3

16年間の正選手 $6 \times 16 = 96$ 名
補員 $3 \times 16 = 48$ 名

$96 + 48 = 144$ 名

全国 46 県の 16 年間は（群馬県実態より推算）

正選手 $6 \times 16 \times 46 = 4416$ 名

補員 $3 \times 16 \times 46 = 2208$ 名

$4416 + 2208 = 6624$ 名

北は北海道から南は沖縄までの参加であり、開催県は2チーム出場である故に、これにプラスされる人口は120名で、 $6,624 + 120 = 6,744$ 名、実に龍大な人口といえよう。

なお各県予選に出場した競技人口は、各県とも1カ年に60名から80名に達する実態ではなかろうか、かりに60名と推算しても、 $60 \times 16 \times 48 = 46,080$ 名となる。

インターハイにいどむためのトレーニングを受けた者と合せ考える時には

$6,624$ 名 + $46,080$ 名 = $52,704$ 名を数える。

実に巨大な競技人口である。そしてその人口が全国各県に1000名以上のほぼ同数ずつ実在しているという実態上の力は大きい。このことは決して無駄にすべきではない。

これらの人口中、体育専門大学に学ぶものをはじめ、職場に家庭にいるものもあるが、この団体徒手体操のトレーニングを受けた年齢層を調査すると、18才から35才までの幅があり、そのほか明治神宮体育大会出場選手等を考えて見ると、実に50才以上から40才までの年齢層であることは、また一つの現実の力である。体操を愛好しその喜びと誇りを体験するようなくも広い幅を持つ年齢層の人口を起用して、指導陣の組織づくりを行なうことが必要で、これこそ「国際競技」まで発展させる日本の団体体操の底辺を育てる基本となろう。幼い子供の遊びの中から体操へ導き、親と子で喜び楽しむ毎日の生活から創造される体操へと培うことも、決して至難とは思われない。

今日全国的に発展した婦人会の民踊も、楽しい明るい心身を培うのに大きな役割をはたしている実状で、この発展は婦人会の組織づくりと、体育行政の裏づけがあってこそ、今日の発展をとげたものと見てもあやまりではなかろう。

指導陣の組織づくりは頗る至難であることは周知のところであるが、経済的裏づけなくしては組織づくりも活動をなし得ないのであり、すぐれた指導者のいない悩みを思うこと

に比べて至難とはいえないであろう。

指導人口の实在の力強さを見るにつけても、幸い歴史ある日本体操協会の組織が全国的に実在する現在、その組織を強化し、大衆の体づくりのため、また明朗な文化的生活を営めるよう近代的感覚を培うために、国民の生活を世界観の上に立脚してトレーニングし、リファインしていくことは実に重要な仕事であると考えられる。

社会体育の発展こそ各種スポーツの底辺の拡充にあり、各種スポーツ選手の「レベルアップ」のため必要欠くべからざるものであるが、世界のすぐれた選手を持つ国々では「国際選手」と等しい「レベル」の若人が 1000 名、2000 名を持っている実態は、その国々の行政的な裏づけによって培われるものが多いのである。

こうした行政的裏づけによるトレーニングを行なうことが、個性の特質を尊重し、より向上発展させる大いなる力となるのではなかろうか。

日本が民主主義国家となって 20 余年のその歴史から見て、画一的、統制的な非民主的方向に陥入る恐れはないと信ずるが故である。

個人の自由と人格を尊重しながら、体操を愛好する集団のトレーニングは集団の自主性を尊重して行なわれるのは当然のことで、あくまで純粋に体操を愛好し世界の持つそのレベルへ近づける方法としての行政的裏づけでなくてはならない。

V

学校体育と社会体育との断層を除去することは、体育の教育にあたるもの、及びこれを愛好するものの等しく望むところであり、この両者の密着を念願しながら、これまでの長い年月の間体育教育者の奉仕と犠牲によって、また大いなる努力とによってあらゆる体育的行事を実施されて今日に至った実態は見のがせない。特に体操の発展向上に寝食を忘れてつくした奉仕者、犠牲者の数もかなり多数にのぼるものである。

女子の社会教育の発展の歩みはのろいが、今日に至って相当拡大されその実績をあげつつあることは、社会体育行政の賜ではなかろうか。大東亜戦争以前の日本の家庭婦人と、民主主義国家の今日の家庭婦人とを比較して見るに、全く躍進といえよう。

終戦によって与えられた男女平等の権利、性別によらず人間の平等が憲法によって保証されることになったが、ここに日本の女性は始めて開放され、封建時代のからを脱ぎ捨て、女性もまた一個の人間としての尊厳に目ざめたのである。

人間としての自覚に立って、大きくはばたいた女性は、家庭の運営に、そして社会の一員として新しい第一歩を自からの力で踏み出した。その場の一つが、地域婦人会の結成と民踊の集団であり、これは社会体育行政の賜と見て誤ちでなかろう。

この地域婦人会の民踊の発展は目ざましいもので、今日の発展向上を見るに至ったその **Energy** は、新しい時代に生きる婦人の自覚と共に、各地域の行政的裏づけがあずかって力あるものと見られる。

全国的に組織された婦人会は競って民踊の研究に精進し、自からの苦しさを乗り越えて楽しさ、明るさを身につけている。そのトレーニングされた力が明るい、楽しい家庭運営に生きて来ている。年令を忘れて輝く太陽の下に踊る姿の美しさ、総てを忘れて踊る姿の尊さ……。

美容体操の年令層は、民踊と比較してやや若年層に広く愛好されていると見られる。

美しい姿勢作り、明朗で豊かな近代感覚の日常生活の行動、かくしてこの人口もまた、著しく拡大されつつある現状は微笑ましい。

女性が自からの体づくりに目覚め、近代感覚を身につけ逞ましく、美しく生きようとするこの両者の求めて止まない意欲……。この期に、よりすぐれたスポーツとしての国民の生活から湧き出る国民の手によって創造していく新しい体操が、一日も早く生み育てられる日を待つものである。即ち、民踊、美容体操の発展をますます望むと共に、新しい体操、高度な構成を持つ体操、国民の日常の生活の中から創造する体操の魅力を、一日も早く国民に知らせるその基礎づくりを行なう必要性を痛感する次第である。

音楽と運動、舞踊的要素を十分含まれた体操、柔軟性、弾力性、流動性そして表現力の豊かな美しいポーズのコンビネーション、芸術的感覚をもたらす新しい体操の発展こそ、日本女性の美しい姿体づくりと、日常生活の美しい動作の向上に寄与するであろう。

美しさを求める心は、古今東西、性別を問わぬところで、その国、その時代に即応した美しさを身につけることこそ、文化向上への Energy となるのではなかろうか。逞ましく美しく品位高い近代感覚を持つことの価値は、家庭生活のへ潤いを社会生活や国民生活の向上のためにその実を示すであろう。

なお女性の体育向上と民族の発展を思うに、より美しく、よりすぐれた健康と、近代感覚豊かな女性の育成こそ重大な仕事であり、女性の向上は民族の発展と向上の鍵と見てもあやまりではなかろう。

組織づくりと行政的裏づけを念願して止まない。

VI

新式体操、団体体操？ 選手育成の年令層は 10 代を持ってこれにあたっている。この世界の実態から感知するに、幼児教育時代にその方向づけの必要性は言うまでもないが、10 代にして「国際競技大会」にいどむ教育、トレーニングと育成を必要とするもので、あるが、特に学校体育の中において、小学校、中学校、高等学校と体育教育を実施する中において、「動き」の科学性、合理性、流動性、近代感覚、豊かな表現の芸術性をもたらすところまで、かつ個性豊かな民族性に富んだ生命力あふる美しいポーズのコンビネーションでなければならない。

現在の学校教育施設の充実や指導教師の人口やその構成についても、あらゆる角度から十分研究を要することは言うまでもない。

しかし一方社会体育行政の確立を見、学校体育と密着した育成計画のもとに、よき指導陣を確立し、深い研究と熱意と愛情によってトレーニングされるならば、生み出すこと、育てることも至難ではあるまい。道はけわしいが余り遠くない。

日本体操協会が今日まではらってきた多大の努力と奉仕とによる実績を基盤として一步前進し、各地域に実在する指導人口をもって組織づくりの確立をしとげるならば、行政的裏づけも案ずるより易しく獲得出来るのではなかろうか。これらの好条件のもとに「国際競技大会」にいどむ若人の育成もまた案外早い……と信ずるものである。

犠牲と奉仕によって育成する危険性をもつ限り、楽しい、明るい、誰でも突進出来るスポーツ、幅広い人口を持つスポーツとして発展と向上を見ることがないだろう。競技人口の稀薄はその競技者に重責を荷なわせ、指導人口の稀薄はまた過労に陥り寛大さを失ない、

精神的安定を欠き、いたずらに「勝たせねばならない」というあせりが生ずる。精神の安定を保ち得る各条件の確立があってこそ、明るい楽しいトレーニングが行なわれ、両者の人間性のふれ合いと安定感の中で、きびしいトレーニングのもたれることが絶対に必要とされるところで、その中からこそ始めて個性豊かな動きが生まれ、一つ一つの運動のイメージが美しく品位がある表現となり、創造へと発展し、「国際競技大会」にいどむ民族性あふれる若人の作品が生まれるであろうと、私は信じてうたがわれない。

なお、全国的に組織を有する日本体操協会は、全国の隅々まで固く手を握り、新しい体操の発展に意欲的に情熱を傾け、各県にほぼ同数を有する指導人口の組織化に早急につとめるとともに、大衆に密着した楽しい体操の集いを、日本の体操を愛好する若人のために一日も早く持てるように努力されることを願うものである。また、道はけわしいが余り遠くない「国際競技大会」へいどむ競技人口の底辺の拡充を重ねて望む次第である。

最後に本研究は、調査に協力して下さった群馬県立高崎女子高校ダンス部による 16 年間の実態調査資料に負うところの大きい点を附記し、ここに深甚の謝意を表する。

参 考 資 料

本学紀要第 1 号 森園澄子「団体徒手体操の一考察」